

巨星墜つ／急逝・石原通男氏



令和4年10月28日、訃報を受けた。

一瞬、衝撃が全身を襲った…。快復を祈った1年半に亘る療養中だった…。

氏は、岐阜大学美術工芸科の6期生(2年先輩)で、高校生の頃から絵画活動に長け、大学時代には既に行動美術協会に出品し、そこに飽き足らず関市の西尾病院長等とともに美術団体 VAVA グループを結成し、ブラジル展進出なども試みた人望ある精力的な人物で、未だ活躍中で倒れたが、その快復を多くの人や仲間が祈っていた…。

ここに逝去を悼み、氏の大きな足跡・実績を記したい。

第一に、【美術教師の育成と地域に根ざした美術文化の振興】である。

氏は岐阜大学美術工芸科同窓初代会長水谷重信氏の後を次いで2代目会長を歴任したが、身をもって美術教師の育成、表現に誘い込むエピソードを記したい。

私は、長良中学校美術科で一緒になったがひとつエピソードを記せば、氏の提案で忘れない一つに4人の美術科教師が順番に「自分の得意分野を提示・講義し、その制作をしよう」を実施したことである。そのように、氏は《自らの専門性》をお互いに深めようとするこだわりがあった。また、自らも常時絵筆を携帯し新しく見る風景、珍しい料理が出たりすると即座にスケッチしたり、表現を切り離して語ることができない人物だった。

そのように氏は絶えず追求の手を緩めず、周囲には美術・造形活動を語り合い追求する《輪》がいつも出来た。地元関市では現職のころから美術教師の育成にとどまらず市民の美術文化の振興・向上に尽力し、推されて文化協会長に長年付き、自らもいくつかの絵画教室を運営し、有数の画家も育成した。また関市の振興にと、本町2丁目に《街角ギャラリー》の開設に尽力し、表現活動の《発信拠点》をと考え、年間を通して市民の表現の発信拠点とした。

要請を受けた私も長谷川清氏と《2人展》を18年間続けたが、関市長始め多くの参観者があった。また、氏と市内を歩くと行き交う市民の殆どが「あつ、先生…！」とあいさつされる《有名人》でもあった。

大きな実績の二つ目には、2015年(平成27年)全国造形連盟・日本教育美術連盟合同の【全国大会・岐阜大会への尽力】である。発表地区は東濃地区《土と炎》、美濃地区《美濃和紙と木材》、飛騨地区《飛騨版画》であったが、美濃地区の発表には、それまでの氏が主宰してきた産業界を巻き込む『木の全国造形展』の歴史的実績に足場を置き、『美濃和紙のあかり展』と併せて、更に発展充実した内容となった。地域の美術文化をも巻き込む長年にわたる尽力があったのである。

大きな実績の三つ目は、岐阜県を流れる【木曾三川／揖斐川、長良川、木曾川の絵画図録】である。例えば、揖斐川の源流・徳山から伊勢湾の河口まで、幾つかの名勝をスケッチブック、絵具を背負って歩き、何日もかけて踏破し表現していった。このような仕事は今まで誰も成しえず、まさに【歴史に残る偉業】を達成されたのである。

10月29日、コロナ禍の中家族葬に、岐阜県造形教育連盟・美術工芸科同窓会の主な役員で、関市総合斎苑「わかくさ」へ6人で赴いた。《同行参列者・敬称略／竹市安彦、鬼頭立城、川出恵美子、林徳和、清水也人、酒井賢》

柩の中の静かな美しい顔を見て、祭壇に掲げられた逞しく優しい今は亡き笑顔の、我らの《石原通男氏》の遺影に向かって手を合わせると、多くの思い出が込み上げ、“石原さん、なぜ死んだ！早かった…”と呟くと、涙が溢れた…。

奥様には1年半前発作が起きた日、電話をもらった。それからその後の症状について電話したりしていたが、「…ちょっと早かったです…」という言葉が印象的であった。

出会ってから50年余、氏のアトリエには何度もお邪魔し、奥様にはその都度に歓待を受け、私の個展にもお揃いで来ていただいた事もあった…。感謝の思いで最後に握手をさせてもらった…。

斎場では多くの石原氏を慕う参列者、立派に育った画家、教え子で溢れ、氏の木曾三川の画集やご夫妻のにこやかなツーショット写真等が飾られ、参列者が改めて見入っていた。【巨星墜つ！ 遣り残した仕事はまだあったのに！】



《岐阜県造形教育連盟事務局長／酒井賢》